
東方異世界大戦

霧夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方異世界大戦

【Nコード】

N8985X

【作者名】

霧夜

【あらすじ】

前作である「東方怪奇談」の続編です。

ここに幻想郷&過去の日本軍&作者オリジナル軍VS謎の元寇国との壮絶な大戦が開戦する。果して勝つのはどちらか!!

幻想郷に海が！！F4F出現！！（前書き）

続編ここに爆誕です。

誤字などありましたらご指導ください。

これからもお願いします。

幻想郷に海が！！F4F出現！！

・・・博霊神社・・・

いつもとんなら変わりのないここ博霊神社に幻想郷最大の異変が伝えられようとしていた。

「れ、れ、霊夢く！！大変だく！！！」

そう叫びながら箒に乗って高速で飛んできたのは、霊夢とよく行動を共にする霧雨魔理沙である。

「なんなの？騒がしいわね。」

霊夢は、あまり興味がないという風にお茶を啜りながら聞いてみた。すると、魔理沙は慌てながら普通幻想郷では、ありえないことを言ってきた。

「呑気にお茶なんか啜ってる場合じゃないぜ！最東端に海が現れたんだよ！！！」

ブフオ

霊夢は、お茶を噴いてしまった。

「ケホ、ケホ、魔理沙何言ってるのよ。幻想郷に海なんてそんな・・・」

とは、言ったものの霊夢には引つかかる点があった。そう、ここ最近の外から人が時代関係なく、また、たま（本当にまれ）に異世界からも人が来るようになってしまったのだ。（のちに外来異変と命名）それによって海までもこちらにはいつて来てしまったのではないかと。

「（・・・考えすぎね・・・）」

「じゃあ、見に行きましよう？」

「よし！さすが霊夢だぜ！」

・・・少女移動中・・・

「まさか……。嘘でしょ……。」

そう。霊夢には、とても信じられないものが目の前に広がっている。それこそまさしく海であった。

「な？私の言うとおりだっただろ？」

魔理沙はなぜか自慢げに言った。

その後、幻想郷中の妖怪が海を見ようと集まりだした。中には、人間の姿もある。

「結構集まってきたわね。（人間いるけど大丈夫かしら？）」

紫も隙間から出てきた。

「あらあら、まさかこの幻想郷に海が現れるなんて……。」

紫も驚いているようだ。

「ん？なんだ、紫の仕業じゃないのか？」

魔理沙は、紫の仕業だと思っていたらしい。

「私が何でこんなことしないといけないのかしら？」

「うん。確かに理由がないよな……。」

「そうでしょう？そ」「あやややや。誰か助けて〜!!」「……。」

紫の話の途中で誰かの助けを求める声が聞こえてきた。

「この声は……。もしかして、文!!！」

そう。文々。新聞でおなじみの射命丸文である。

すると、文が高速で飛んできた。

「どうしたの文？」

「霊夢が聞いてみた。」

「あややや。実は、空飛ぶ変なものが追いかけて攻撃してくるんですー!」

「……へ?」「」「」

その場にいた全員が一斉に言った後それは、やってきた。

ゴーン……!

大きな音を立ててやってきたのは、独特の航空機である。

「まさか・・・!? あれは・・・」

優末は、知っているようだ。

「優末知っているのか?」

佑也が優末に尋ねた。

「あれは、第二次世界大戦中にアメリカ軍が使っていたF4FW
イルドキャット!」

そう。アメリカ航空隊が使用していた戦闘機である。

F4Fは、霊夢たちへ機銃掃射し始めた。

「これであそこの奴らを殺れば二階級特進も夢じゃねーぜ!」

コックピット内のパイロットは、そんなことを叫びながら打ちつ
づけた。運よく弾丸はすべて外れた。そして、

「いきなり撃つてくるとは・・・恥を知れ!」

優末は、キレて大量の対空高射砲を出現させ対空迎撃を行った。

一発がF4Fに直撃し大破して落ちて行った。

こうして、F4Fとの戦いは優末の活躍により終わった。

幻想郷に海が！！F4F出現！！（後書き）

次回は、ついに幻想郷が動き出します。

国を設立！！（前書き）

はい。無理やり話を進めることが多くなると思います。

国を設立！！

前回いきなり襲撃してきた（文を追ってきたついでに手柄を立てようとして）F4Fを大量に持つ国があると文から情報を聞き出した紫たちは、焦った。なぜなら、あの時は運よく銃弾が当たらなかったからいいものの、後で確認したら地面に穴が開いていたのである。あんなものが何十機いや何百機できたらいくら妖怪でも対処ができなくなると思ったからである。そして、今紫の家にて会議が行われていた。

「ん」と・・・とりあえずどうする？」

紫がとりあえず聞いてみた。すると、

「文殿。確かに敵は、国を築いていたのですか？」

いきなり隙間によって召集された佑司元伍長は、文に聞いてみた。

「はい。確かにその周辺一帯が一つであるかのように集団で生活していました。」

「そうですか。」

佑司伍長は思った。

「（このままだと侵略される！）」
と。

こちらは、人里というものはあるが、国というものがない。第一国を作ったとしても妖怪が人間やほかの妖怪と協力し合うかも微妙である。しかし、建国を求めるものがいた。

「ここは、国をつくらなければ我に勝利はまずないでしょう。」

そう言ったのは、なんとあの山本五十六長官である。先日、一式陸攻で人間の里付近に着陸したのを紫たちが救助したのである。

「そう。そうね！このまま何もせずに変な奴らの侵略を受けるよ
りましね。そうしましょう。」

その後、一部から批判の声が上がったもののすぐに落ち着き人間どころか妖怪までも賛同したのである。国名を決める国民投票を取

つたら次のような国名が上がった。

- ・「幻想帝国」
- ・「東方国」
- ・「東方共和国」
- ・「幻想共和国」

である。ちなみに結果は、「幻想帝国」は違う人の小説とかぶるからということでも却下。「東方国」は、普通すぎるといふ紫の意見でも却下。「東方共和国」は、一部の妖怪から批判があり却下。残った「幻想共和国」が国名に決まった。

続いて軍は、「幻想共和国防軍」と決まった。兵員数は、陸軍1000人、空軍50人、海軍0人というどこからどう見ても分かる弱小軍である。また、装備や兵器は

陸軍

- ・装備

三八式歩兵銃（銃剣付き） ナイフ 十四年式拳銃

- ・兵器

一式戦車×3 一式陸攻×3

空軍

- ・装備

十四年式拳銃 ナイフ

- ・兵器

である。また海軍は、兵器も武装もないためこれからどうにかしていくことになった。

また、紫を総理大臣に決めた。理由は、妖怪の一部から人気があり指揮が高まると予想されたからである。

こうして、幻想共和国の建国は、スムーズに終わったのである。

・・・幻想郷最南にある元寇国・・・

「そうか・・・。ついに国を作ってきたか。」

男は、そう呟いた。

「はい。ハン閣下。」

軍人らしき服に身を包んだ男は、そう告げた。

「うむ。報告ご苦労であった。下がってよいぞ。」

「ハ！」

ハンにそういわれ出口へその男は、去って行った。

「だが、敵は小国にすぎん。まだ問題なかるう。」

ハンと呼ばれた男は、その口元に笑みを浮かばせ続けた。

国を設立！！（後書き）

どうでしたでしょうか？建国が無理やりですねWWW
次回からついに作者オリジナル軍が出る予定です
では。

「……どこだ？」（前書き）

はい。ついに作者オリジナル軍の登場です。なんか某ゲームみた
いすねwww
では、さようなら。

「ここは・・・どこだ？」

とある海域を艦隊が航行していた。その海域は、霧が濃く周りが10mも見えない。たまに見えるのが海面から少し突き出た岩礁が見えるだけである。

・・・とある艦隊の巡洋艦の艦橋・・・

「レーダー士、前方に岩礁は、あるか？」

とある巡洋艦の艦長らしき男は、レーダー士に尋ねた。

「いえ、岩礁レーダーに影はありません。ALLクリアです。」

「そうか。よしぜんそく前進！！」

「機関全速！！」

艦内は、少し騒がしくなったがすぐに落ち着きを取戻しつつあった。

・・・数分後・・・

「そろそろだな。全艦に通達！内容は、『機関停止。』だ。」

「了解！！」

艦長がそう告げるとさっそくそれを通信士が全艦に通達する。

「総員！花束を持ち艦外へ出る。これより『英霊への花束贈呈』を行う！」

艦長がそう告げると全員が艦外へ出ていく。

「総員！花束贈呈！」

艦長が叫ぶと全艦の甲板から大量の花束が海面へ落下していく。すると、全艦の艦長が言い始めた。

「ここ『死の海域』で心なしか沈んでいった英霊達よ！我々は、

諸君らの事を絶対に忘れることは、ないだろう！その証としてここに花束を贈る！今は、ゆっくり休み我々、同士の安全を見守ってほしい！」

艦長が言い終わると

「総員！！敬礼！！」

士官がそう叫び全員が敬礼する。

ここ『死の海域』は、霧が濃く視界が全く効かないことと、水深が浅い場所と深い場所が入り混じっているという超最悪条件満載の海域である。そのため、多くの軍艦、民間船、貿易船が沈んでいる。そのためこの世界の国では、英霊を慰めるためにも花束を海に投げ入れるようにしているのである。

・・・あれから数分後・・・

「よし、機関始動！全速前進！！」

「機関始動！全速前進！！」

艦隊が霧の中を動き始めた。しかし、その直後であった。突然レーダー士が叫んだ。

「レーダーに反応！！レーダーに原因不明のノイズ出現！！距離1海里（1852m）！！」

「ものすごく近いじゃないか！！」

「何で気づかなかった！！」

「突然現れたんだ！！」

等という声が巡洋艦内を包み込む。そして、目の前には得体の分からない光がきらめいている。しかし艦長は

「慌てるな！機関全速後退！！」

「ダメです！間に合いません！！」

そうすでに光との距離は、500メートルしかなかったのだ。

「総員！衝撃に備えろ！艦外の者は至急艦内へ退避せよ！！」

全員が艦内に退避した瞬間すべての艦が光に包まれた。その海域からは、すべての艦が一瞬にして姿を消した。

・・・光に包まれてから数分後、巡洋艦艦橋・・・

「うーん」

そんな声を上げながら艦内の水兵達は起き始める。そして艦長は

「全艦に通達！！内容『被害はないか？』だ。」

「りよ、了解！！」

返ってきた返信は、「異常なし」だけであった。

「艦長！全艦より『異常なし』が返ってきました。」

「そうか・・・。それにしても・・・ここは、どこなんだ？」

巡洋艦艦長が一番気になっていたのは、ここがどこかだ。さつきまで『死の海域』にいたはずが、今は霧がない快晴の天気の中である。しかし、そんなことを考えている時間はなかった。レーダー士がまた叫んだのだ。

「未確認機の編隊接近中！！5機の編隊です。」

「何！！一応のために対空戦闘の準備をしておけ。」

「了解！！対空戦闘よーい！！」

しかし、この飛んできた五機は、幻想共和国防空軍の一式戦闘機二機と、零式艦上戦闘機二二型三機の編隊であった。たまたま、出現した海にあった島から訓練で飛行してきた戦闘機隊であった。

「隊長殿！！」

「ああ。分かっているありや大艦隊だな・・・。」

零式艦上戦闘機の一機に乗っている金沢快斗一等空士が隊長の一式戦闘機に乗る市川孝一等大佐いちかわたかしに無線で報告しようとしたが市川一等大佐は、すでに気づいていた。市川が見た艦隊は、さつきから出てきている作オリの艦隊である。

艦隊構成は、駆逐艦二十隻、駆逐魚雷艇三十隻、戦艦五隻、対空

攻撃防衛艦十五隻、対潜攻撃艦十隻、重巡洋艦一隻、航空母艦十隻、輸送船三十隻、強襲揚陸艦二十隻という大艦隊であった。

「こりゃ、大変なことになったな。」

戦闘機隊の隊長と巡洋艦の艦長が同時に言った。

「」は・・・どこだ？（後書き）

艦隊の数がめっちゃめっちゃババいですねWWW
ちなみに艦隊の部隊構成は、

第一水雷艦隊

司令官：？

旗艦：玄武型重巡洋艦「玄武」

他：駆逐艦十隻、駆逐魚雷艇十隻

第二水雷戦隊

司令官：？

旗艦：チャルチー級駆逐艦「チャルチー」

他：駆逐艦九隻、駆逐魚雷艇十隻

第一独立魚雷艇隊

司令官：？

旗艦：駆逐魚雷艇「春」

他：駆逐魚雷艇九隻

艦砲部隊

司令官：？

旗艦：加賀型戦艦「加賀」

他：戦艦四隻

独立対空攻撃隊

司令官：？

旗艦：対空攻撃防衛艦「春川」

他：対空攻撃防衛艦十四隻

独立対潜攻撃艦隊

司令官：？

旗艦：大戦攻撃艦「春風」

他：九隻

航空戦隊

司令官：？

旗艦：海波級航空母艦「海波」

他：九隻

艦載機：九百機

独立輸送船団

指揮官：？

旗艦：輸送船「才-110」

他：輸送船二九隻

兵員：計三千名

搭載兵器：六十両

独立強襲揚陸隊

指揮官：？

旗艦：強襲揚陸艦「キ-110」

他：十九隻

兵員：二百名

搭載兵器：二百両

です。

交渉（前書き）

無理やり要素満載です。

交渉

「さーて。どうしたものか・・・。」

そう言ったのは、市川孝一等大佐である。理由は、あの大艦隊が自分たちに機銃？のような丸っこいものについている二本の砲身を向けているからだ。しかも、すべての船がである。

「とりあえず。信号で海域退去を・・・ん？」

なんと、向こうの艦隊から発光信号を送ってきたのである。

「何々？『我々は、気が付いたらこの海域に流れ着いた。諸君らと戦うつもりはない。ならばに交渉がしたい。至急真中の空母に着艦されたし。回線チャンネルは、10ch』か。」

「よし。通信しよう。」

孝は、言われたとうりの10chで回線を開いた。すると、

「我々は、ライトニア共和国、国防軍第31特殊任務部隊隊長のゼロ中将だ。聞こえていたら返答をこつ。」

向こうから無線通信を行ってきた。

「我々は、幻想共和国、国防空軍、演習戦闘機隊隊長の市川孝一等大佐です。指示どうり空母に着艦する。」

という返答を返し空母に着艦した。空母の飛行甲板は、市川孝が外で見てきたどの空母よりも広くて立派だった。しかも、ものすごい数の航空機？が待機していた。すると前から四人の人が歩いてきた。孝ら戦闘機乗り五人は、幻想共和国防空軍式（旧日本空軍）の敬礼をする。すると四人も敬礼してくれた。見た目からして物凄い階級が高いことが分かる。

「幻想共和国防空軍、演習戦闘機隊隊長の市川孝一等大佐ならびに、隊員四名です。」

改めて自己紹介をする。

「ご丁寧ありがとうございます。私がこの艦隊いわく、この部隊の隊長のゼロ・マーキュリー中将です。」

やはりであった。孝が睨んだとつり階級がものすごく高い。

「副隊長のキルスト・マーケン少将だ。」

「（副隊長までかー！）」

「隊長代理の井上幽未大佐だ。」

「（日本人のような名前だな・・・）」

「副隊長代理のカイザ・ハルシュタイン中佐だ。」

なんと、副隊長クラスのカイザ以外が孝より階級が上だった。

「（凄い人ばかりだ）」

それが、本音であった。

・・・海波級航空母艦「海波」艦内会議室・・・

あれから数分後、艦内会議室にて会議が行われていた。

「とりあえず、こんなところですね。」

孝は、この世界について簡単なながらも説明した。

「・・・信じられないな・・・。」

その答えこそが普通であった。

その後会議は、続き以下の条約が締結された。

・元ライトニア国防軍は、これより幻想共和国国防軍として生活する。

・元ライトニア国防軍は、武器弾薬の製造ならびに兵器の生産をし幻想共和国に提供すること。

・幻想共和国は、元ライトニア兵士に衣食住を提供し、兵員も提供する。

・元ライトニア国防軍兵士は、幻想共和国の国民として生活し、幻想共和国の方の元生活する。

・この項目に同意したのちに、最東端にある『幻想島』に兵力ならびに部隊、基地を置くことを幻想共和国は、認める。

である。

交渉（後書き）

「条約すくな!!」
「と思いますよねwwwわかります。」

佑也中隊への命令！！（前書き）

ネタがないよー（ーこ）

佑也中隊への命令！！

・・・幻想島・・・

ここ幻想島に元ライトニア国防軍第31特殊任務部隊は、部隊名が幻想国のものに改名された。新部隊名は「幻想共和国防軍第一特殊任務部隊」となった。そして、幻想国内では、「精鋭の部隊」とも言われている。理由は、幻想国では見たことのない武器や兵器を持つているからでもあるが、ほかにも実践経験が豊富であるからだ。そのため、幻想共和国防軍から人員も送られてくるが、特殊な能力持ちまたは、訓練で好成績を残した者だけである。

その中になぜかあの姿があつた。

「明石中尉殿〜！」

そう呼びながら兵士が一人走ってきた。

なぜ佑也がいるのかというと、幻想共和国は軍への志願兵制度を開始し4人は、「自分たちの能力がいかせるのでは？」ということとで軍に志願したら能力が認められ、見事第一特殊任務部隊の隊員として配属されたのである。

回想終了！

「どうした？」

「基地司令方がお呼びです。至急基地司令部までお越しください。」

「おう。ありがとな。え〜と・・・桂城伍長。」
「そうだ！桂城だ！ありがとな。桂城伍長。」

桂城と呼ばれたその軍人は、「ハ！では！」と言って足早に去っ

て行った。ちなみに教えたのは達也である。

・・・幻想島方面軍基地司令部・・・

「失礼します！佑也中隊隊長佑也中尉入ります！」

佑也は、ドアを開けて中に入った。すると、中にはゼロ中将のほかにも、キルスト少将、井上大佐、カイザ中佐がいた。佑也はとうとう

「（え・・・。なにこれ¥（^O^）／俺何かやらかしたっけ？）

と冷や汗をかきながらいろいろな考えを巡らせていたがそのどれでもなかった。

「佑也中隊には井上大隊と共にこの近海に到着予定の五十六長官機の出迎えと護衛にあたってもらおう。」

ということだった。

佑也中隊への命令！！（後書き）

今回短いです。

五十六長官をお迎え・・・のはずが対空戦闘！！全編（前書き）

僕の今の思考

「出したくなったらとにかく出す！！」

ですwww

では、どござw

五十六長官をお迎え・・・のはずが対空戦闘！！全編

・・・幻想島近海・・・

今この海域を二つの艦隊が航行していた。そう、前回山本五十六長官をお迎えするために出撃した二つの艦隊である。編成は、

佑也中隊第一水雷戦隊

司令官：明石 佑也中尉

旗艦：幻想級重巡洋艦「幻想」

他：駆逐艦五隻

井上大隊第一混成戦隊

司令官：井上 幽末大佐

旗艦：海波級航空母艦「海波」艦載機：100機

他：重巡洋艦一隻、駆逐艦五隻、駆逐魚雷艇十隻、対潜攻撃艦三隻、

対空攻撃防衛艦五隻、航空母艦二隻

艦載機：300機（旗艦含む）

である。もう少して長官機が見えてくるはず「レーダーに正体不明の航空機を発見！！」・・・

「状況を詳しく教えてくれ。」

井上大佐は、戦い慣れた司令官だけあってすぐに詳しい情報を得ようとした。

「はい！敵機はすべて＊レシプロ機である模様！戦闘機50機！爆撃機30機！＊雷撃機20機！中規模の飛行編隊だと思われます！また、戦闘機隊が長官機の方へ向かっている模様！」

「まずいな・・・」

井上大佐がこう言ったのには理由があった。それは、長官機が「一式陸上攻撃機」だからである。一式陸攻は、第二次世界大戦中に山本五十六長官がソロモン諸島の視察で搭乗していたので有名な機体だが、性能がいまいちな機体だ。なんといっても、装甲の薄さが目立つ。また、大型のため小回りも効かない。一応戦闘機の護衛がついているが、幻想共和空軍の戦闘機隊はたったの10機である。50機に勝てるわけがない。

「よし。全空母に通達！内容は『全戦闘機隊を発艦させよ。また、近くに敵空母が存在する可能性が高い。偵察機も発艦させよ』だ！」
「了解！」

そう言っただけで通信士は全空母に通信を取り始めた。また、艦内通信にて空母「海波」の艦内も騒がしくなる。

・・・数刻後・・・

全空母三隻から戦闘機90機と偵察機6機が発艦していた。

佑也は、旗艦の艦橋からその姿を見守りつつ、指示を出した。

「よし！全艦対空戦闘用意！」

井上大佐も同じ指示を出した。

ついに、国籍不明機が近づいてきた。

「国籍不明機に次ぐ！諸君らは、領空を侵犯している！ただちに領空より退避せよ！」

いつもは、優しい声の井上大佐が打って変わって張りのある声で呼びかけを行った。しかし、敵機は退避するどころか爆撃機が急降下してきた。

「敵機呼びかけにおおじません。・・・！？敵機急降下してきます！！」

「何！？」

井上大佐は慌てた。なぜなら、レシプロ機のこの動きは、

「*急降下爆撃？」

そう呟いた瞬間敵の爆撃機から爆弾が投下された。完全な領空侵犯および奇襲攻撃。戦争犯罪である。

ドン！・ドドン！ザパー！

という音と共に爆弾が命中したり外れて海面に命中したりしている。

「*対空砲火迎撃始め！！！」

井上大佐がそう言うと全艦から一斉に対空砲火が打ち上げられる。対空砲火が命中し片翼がもげて落ちて行ったり、空中で火を噴き四散したりした。

「左舷魚雷接近！！！」

「回避運動をとれ！！*対魚雷機雷をばらまけ！！！」

そう言うと各艦から対魚雷機雷がばらまかれ命中した魚雷が水しぶきを上げていく。

五十六長官をお迎え・・・のはずが対空戦闘！！全編（後書き）

今回出た難しい(?)用語

- ・レシプロ機：いわゆる第二次世界大戦中のプロペラ機の事。
- ・雷撃機：主に対艦専用に使われる機体。機体下部に魚雷を搭載し、水雷攻撃をする機体の事。他の呼び方「攻撃機」など。主な兵器「TBFアベンジャー 雷撃機」など
- ・急降下爆撃：高高度から急降下し爆弾を投下し、爆撃すること。
- 主な兵器「JU87スツーカー」など
- ・対空砲火：主に対空砲、対空高射砲、対空機銃で対空攻撃を行うこと。
- ・対魚雷機雷：作者オリジナルの兵器。魚雷対策用として作られた機雷。投射ご6秒で展開し水中を進んでくる魚雷を迎撃する。

五十六長官をお迎え・・・のはずが対空戦闘！！中編（前書き）

前回の続きです。今回は、海戦メインになっているかも知れませんが、ぜひどうぞ。

五十六長官をお迎え……のはずが対空戦闘！！中編

魚雷をいくらか粉碎しても、次々魚雷や爆弾が向かってくる。しかも、軍艦に通用するわけもない機銃まで掃射してくる機体もいる。

「左舷魚雷命中！！左傾斜15°！！」

現在少しばかりでなく被害が出始めていた。今の被害は、

佑也中隊

・幻想級駆逐艦「幻想」……*小破

・幻想級駆逐艦「新星」……*大破、*機関損傷

井上大隊

・海波級航空母艦「海波」……小破、レーダー一機損壊

・玄武級重巡洋艦「玄武」……装甲一部損傷

・チャルチー級駆逐艦「チャルチー」×二隻……小破

・駆逐魚雷艇「春」……小破

である。凄い被害である。しかし、まだ攻撃を行ってきている。しかし、そこで偵察機から連絡が入ってきた。

「こちら、*偵察機T-89二番機！敵空母を発見！！空母は二隻いる模様。一隻は大型空母、もう一隻は小型空母のごとし。座標89-25！！」

「やはり、空母は、二隻いたか。佑也中尉！*雷撃艦隊をすべて引き連れて敵空母の撃沈に迎え！」

「了解！全艦を率いて撃沈に向かいます！」

そういうと佑也はうごける駆逐艦（井上大隊の艦も合わせた）を連れて行った。

……数刻後……

「佑也部隊長！！敵艦隊発見！！距離2000！射程距離内まであと500！」

「よし。全艦*砲雷撃戦用意！！」

「敵射程内に入りました！！」

「全艦、砲撃始め！！」

そう佑也が命令すると全艦から一斉に艦砲射撃が開始された。

・・・元寇軍空母艦橋・・・

「我が軍の攻撃により幻想共和国防海軍に甚大な損害を与えました！」

「その報告に偽りはないだろうな。」

「もちろんです！我が軍は無敵であります。」

そう部下が報告してきたが意外と信じられなかった。本当に敵艦隊は甚大な損害を被っているのだろうか？そう悩んでいると悪夢が舞い降りた。

ガン、ドシャーン

空母ともあろう巨体が大きくゆすれる。

「何が起きた！！」

「敵艦隊からの艦砲射撃です！両艦共に*中破です。」

「レーダーに反応！小型艦艇多数！高速接近中！」

「小型・・・艦艇？どれほどの大きさだ？」

「はい・・・。それが・・・駆逐艦以下です。速力は40ノット出ている模様！」

「駆逐艦以下か・・・」

「そんな小型艦になにができるんだ？」

駆逐艦以下の艦艇ならいくら速力が速くても空母にそれほどのダ

メージは与えられない。それが元寇軍の水兵達の考えだった。しかし、この空母の艦長には何か引つかかることがあった。そしてそれが現実になった。

「魚雷多数接近！敵小型艦艇より射出された模様！！」

「何！？」

そう、元ライトニア軍の駆逐魚雷艇には戦艦にも被害を与えることを目的とした「*汎用型ドリル駆逐魚雷」が搭載されている。次々と空母の船体に刺さり内部から爆発していく。

「第3、4、5、7、8、11、13区画浸水！第6、8、10

弾薬庫引火被害なおも拡大中！！我が艦はもう持ちません！」

「ふむ。もうここまでのようだ。総員退艦せよ！」

退艦命令が発令されると艦内は地獄と化す。我先にとドアにあふれるようになり詰まる。その中でも船はどんどん傾いていく。

そして数刻後元寇軍の空母は二隻とも沈没した。

五十六長官をお迎え・・・のはずが対空戦闘！！中編（後書き）

今回の用語

- ・小破：少ない艦へのダメージ。例えば爆弾の至近弾命中など。
- ・大破：艦への甚大なダメージ。特にいくつも爆弾や魚雷が命中したなど。
- ・機関損傷：機関部に損傷を負うこと。
- ・偵察機：偵察のために用いられる航空機。各種レーダーによる索敵任務をこなす。
- ・雷撃艦隊：水雷戦隊の違う呼び方。駆逐艦や巡洋艦で編成される。
- ・砲雷撃戦：艦砲や魚雷を使った攻撃の事。（あってるかな？）
- ・中破：小破と大破の間のダメージ。
- ・汎用型ドリル駆逐魚雷：作者オリジナルの魚雷。魚雷の先端にドリルがついており、敵艦に命中すると、敵艦の外装に穴をあけ内部から爆発を起こす魚雷である。汎用性に優れているが構造が複雑なため量産には向いていない。

今回短いです。サーセンorz

五十六長官をお迎え・・・のはずが対空戦闘！！後編（前書き）

今回は、出撃した航空隊の話になると思います。最近時間がないんです。投稿が間に合わないこともあるかも知れません。本当に時間がほしいwww

五十六長官をお迎え・・・のはずが対空戦闘！！後編

井上艦隊と佑也艦隊が対空戦闘&空母撃沈を行っている頃、戦闘機隊も空戦を行っていた。元寇軍機は、まるで長官機にしか興味がないという感じで戦闘機隊には全く気が付かなかった。

「*クレマン隊長。妙ではありませんか？こんなにも接近しているのに攻撃してこないなんて。」

そう言っている間にも零戦と元寇軍のF4Fが空戦を開始した。

「だが、これほどまでに倒しやすい敵機はいないだろ？隊長機より全機へ2機ずつ編隊を組み攻撃せよ！」

「了解！！」「」「」「」

そう言くと2機ずつ編隊を組んで*FL-2戦闘機隊が敵機へと向かっていく。

「喰らえ！」

という声と共にFL-2戦闘機から*JUP空対空ミサイルがF4Fを追尾し始める。もちろん、F4Fの性能では避けることができなかつた。

「なんだ・・・今は・・・幻想共和国の戦闘機は化け物なのか？」

F4Fに乗っているパイロットは己を狙って襲ってくる部隊に恐怖していた。もちろん恐怖していたのは元寇軍だけではない。

「すさまじい物だな・・・あの*ジェット機という物は・・・。」

山本五十六長官は、レシプロ機しか知らなかつたのでジェット機を初めて見たときにこう呟いていた「プロペラがついていないが・・・こんなものが飛ぶのかね？」と。しかし、目の前では、そのジェット機が目にも止まらぬ速さで空中戦を行っていた。

「これで終わりだ!!落ちろ化け物!!」
そうコックピットで叫びレバーのボタンを押すとF4Fの12・7ミリ機銃×6が火を噴いた。しかし、FL-2戦闘機には全くと言っていいほど効かない。それどころか、逆にお返しとばかりに尾翼の間の対空機銃から銃弾が飛んでくる。そしてその銃弾が方翼に当たり火を噴き始めた。

この空戦は幻想国防軍の圧倒的な勝利で終わった。しかし、レシプロ機の方には被害が出た。被害は

・零式艦上戦闘機二二型 6機撃墜 2機生還 元出撃数10機

である。そしてクレマン隊長は

「こちら艦載戦闘隊一番機。敵機を撃滅。これより長官機と共に帰艦します。」

「こちら空母艦隊了解。帰艦せよ。」
こうしてこの空戦は終わりを告げた。

・・・元寇国・・・

「何？攻撃隊が全滅？」

「はい。ハン閣下。そのように報告が来ております。」

「そうか。敵は一筋縄ではいかないということか……。それは音で考えるにしてカンよ。」

「なんでしよう？閣下。」

「我が生きていたころ、モンゴル帝国を築き上げるのが夢であったのは行っておるう？」

「はい。確か……。」

「それをここで実現しようと思った。これより我が国をモンゴル帝国と名乗ることによろ。」

「は！では明日国民を集めることにいたしましょう。」

「うむ。ではそのようにいたせ。」

こうして、ハン自ら元寇国を改めてモンゴル帝国にするといつのはまた別の話である。

五十六長官をお迎え・・・のはずが対空戦闘！！後編（後書き）

今回の用語

- ・クレマン：元ライトニア兵。階級は中佐。かなりのベテランだが空では戦闘機以外の機体には乗れない。たまに死亡フラグを立てることもある。
- ・FL-2：元ライトニア空軍の主力戦闘機である。大きさはF-15と同じ。二人乗りの機体で後ろの二枚の尾翼の間に対空機銃が設けており対空砲火もできる。武装としてJUP空対空ミサイル、40mm航空機関砲、無誘導爆弾が装備されている。安定性がとても高い。愛称は「スカイタイガー」である。
- ・JUP空対空ミサイル：先端に熱探知&熱源探知レーダーが搭載されており抜群の追尾性を誇る。のちに元寇軍から「空のチーター」と呼ばれるようになるというのは余談である。
- ・ジェット機：ジェットエンジンで空を飛ぶ機体の事。

第一特殊任務部隊出撃！（前書き）

ついに、本格的に動いてもらおうと思います。元冠軍の宣戦布告は
次回の次になりそうですねwwww

第一特殊任務部隊出撃！

・・・幻想島 幻想共和国防軍第一特殊任務部隊本部・・・

あの戦いから5日が過ぎた。時間が飛んでいるのはお約束。

「そうですか・・・。了解しました。」

「大変だと思っけど頑張って頂戴。」

そう言っつて紫首相からの通信が切れた。

「今回は、面倒な任務になりそうだ。」

そう言っつて立ち上がったのはこの部隊の隊長であるゼロ・マーキ
ユリー中将である。

「悪いが、兵を集めてくれ」

・・・数刻後・・・

「これより、閣下のご命令を伝達する。」

兵士全員が固唾を飲んで次の言葉を待った。

「『第一特殊任務部隊は妖怪の山に展開しているとされる元寇
国軍を排除せよ。出来る範囲で殺すことなく*捕虜にせよ』との事
だ。この命令により我が部隊は妖怪の山へと向かうことになる。出
撃時刻は*12 (ひとふたまるまる)だ！全員遅れずに集合せ
よ！全員解散！」

そうゼロ中将が言い放つと全員が散らばって出撃準備を始めた。

・・・数刻後・・・

「全員そろったか！」

「キルスト大隊全員集合完了！」

「井上大隊全員集合完了しました！」

「カイザ*狙撃部隊全員集合完了!」

「佑也中隊全員集合完了いたしました!」

「よし!全員搭乗!」

その号令と共に全員が所定のへりや*輸送機、*ガンシップに乗り込んで行った。

・・・数刻後・・・

第一特殊任務部隊は一機も欠けることもなく飛行していた。編成は、

陸上部隊

・歩兵：5000名・対戦車兵：2500名・狙撃兵：10名・衛生兵：100名・妖精部隊：10名

・軽戦車：15両・重戦車：10両・装甲輸送車：2台・自走ミサイル砲：2台・自走砲：5両・*歩行型ミサイルポッド：2機

航空部隊

・*空挺部隊：10名・輸送機：10機・*戦闘爆撃機：3機・戦闘へり：30機・輸送へり：10機・*特殊輸送へり：2機

である。そして、妖怪の山がもう近くまで迫っていた・・・。

第一特殊任務部隊出撃！（後書き）

今日用語

- ・ 12 : 十二時を指す時の軍事用語。二十四時間表記で表す。
- ・ 狙撃：主にスナイパーライフルなどを使って遠くから攻撃すること。
- ・ ガンシップ：主にヘリの英語版。輸送機を戦闘用に改造したのもこの分類。
- ・ 歩行型ミサイルポッド：ミサイル発射機が四足歩行するようになった形の兵器。作者オリジナル。
- ・ 空挺部隊：主に輸送機などから落下傘降下する歩兵の事。
- ・ 戦闘爆撃機：空戦と空爆両方を行うことができる万能機。
- ・ 特殊輸送ヘリ：歩行型ミサイルポッドを空輸するために作られた輸送ヘリ。作者オリジナル。

時間がなくて少ししか書けなかったorz

山一号作戦 出撃前の時間(前書き)

今回無理やり。サーセンorz

最近東方キャラを出していなかったな〜・・・と思い、今回出しました！

山一号作戦 出撃前の時間

・・・妖怪の山 合流地点・・・

幻想共和国防軍第一特殊任務部隊は妖怪の山の麓に着陸または、落下傘降下にたどり着いた。この山にも元からいた哨戒天狗や、一部の鴉天狗によって編成された義勇軍が存在する。この*義勇軍は主に妖怪の山の防衛のためだけの義勇軍である。武器は剣、三八式歩兵銃まであるが三八式を使うのは鴉天狗の方であり、哨戒天狗の方が剣などが多い状況である。義勇軍は、『妖怪の山義勇軍』として活動している。

今回のこの妖怪の山では天狗たちの了承（紫により強制的）により共同戦線がひかれることになった。この作戦を『山一号作戦』として発令された。

「あなた方が『妖怪の山義勇軍』ですか？」

ゼロ・マーキュリー中將は穏やかな声で尋ねた。

「はい。この度はよろしく願いますよ。」

そう答えたのは鴉天狗で義勇軍の小隊長である天景明てんけいめい 乱らんである。

一応隊長ということで九二式重機関銃を持っているが、元ライトニア共和国防軍兵にとっては何百年も昔の代物であり、「使い物になるのか？」という意見まで出たほどである。ゼロ中將と乱が今回の作戦の話をしている頃兵士たちは、ある人物から取材を受けていた。

「では、あなたはなぜ兵士に志願したのですか？」

取材しているのはもちろん射命丸文である。そして取材を受けているのは井上幽未大佐である。

「志願した理由ですか。・・・あんまり話したくないのですが・・・

。。まあ、外伝の方で。」

「分かりました。・・・では、この作戦はどうなっただけですか？」

か？」

「そうですね。一番はやっぱり敵味方ともに死傷者が出ないことですね。」

「ありがとうございます！」

そういつと違う兵士の方へと行ってしまった。

・・・数刻後・・・

「まだかな？」

「もう少しで来ると思いますが・・・。お！来た！」

そう言った瞬間到着したのは博霊霊夢と霧雨魔理沙である。

「なぜこの二人？」

カイザが の方で会話をしていたゼロとマーケンに尋ねた。

「うーん？紫にいきなり頼まれてきたのよね。」

答えたのは霊夢でありかなり面倒くさそうな顔をしている。

「私は暇だったからついてきたんだぜ。」

魔理沙は笑いながら答えてきた。すると、幽末が

「ゼロ隊長！戦闘ヘリ部隊出撃準備完了しました。いつでも飛べます！」

「よし。そろそろ出撃するか・・・。」

こうして、『山一号作戦』は始動されたのであった。

山一号作戦 出撃前の時間（後書き）

今日の単語

・義勇軍：正式の軍隊ではない部隊の事。主に、開拓や軍の後方支援などを受け持つ。

今回短くて本当に申し訳ありませんorz最近誤ってばかりのよ
うな（笑）

次回から『山一号作戦が動き出すと思います。

ちなみに井上幽末の入隊理由は外伝の方で。

山一号作戦 交渉開始（前書き）

今回は中篇として交渉が開始されます。最近休みほとんど無しで投稿しているのは、テストに備えてのことです。

山一号作戦 交渉開始

・・・妖怪の山・・・

幻想共和国防軍第一特殊任務部隊＋ は、妖怪の山に展開する元寇軍への交渉必要であれば駆逐するために移動をしていた。

「そろそろ元寇軍が展開している場所につくか？」

ゼロ中将がそう尋ねると部下が地図と偵察写真、レーダーの情報を照らし合わせながらゼロ中将に報告した。

「えつと・・・もうー？先に義勇軍の部隊が展開して見張っている場所に到着です。」

「そうか・・・よし、もうちょっとスピードを出して合流を急ぐか・・・よし！もう少しスピードを上げて合流を急げ！」

「了解！！」

そういうと少しスピードを上げた。

「それにしても、この装甲・・・何とかというのは揺れるし狭いはね。」

「霊夢・・・こんなところでもお茶啜ってるお前が言えることか？それに、装甲湯増車だろ。」

「装甲輸送車です。」

お茶を啜る霊夢とそれにツッコミ、装甲輸送車を間違えた魔理沙に突っ込んだのはカイザ中佐であった。そんなことをしていると車内に車内放送が流れた。

「あと、十分で合流予定地点に到着する。総員武器の最終確認を開始せよ！」

その放送が終わると同時に兵士が武装の最終点検を開始した。車内が騒々しくなる。

「なんか・・・いずらいな・・・。」

「そう・・・ね。」

・・・数刻後・・・

「あれか？」

「はい。」

目の前には数多くの元寇軍兵士&戦車部隊が居座っていた。何とか戦闘は起きていないが、何かあるとすぐに戦闘に発展しかねない状況である。

それよりも気になるのが、天狗たちの目つきである。自分達の山を好き勝手ふみにじられているのがよほど気に入らないのである。とても怒りに満ちた目つきをしている。

「では、博麗霊夢さんお願いします。」

「霊夢でいいわ。分かった。」

・元寇軍・

「ありやなんだ？」

「さ、さあ？」

そんな会話を元寇軍の妖怪の山攻撃部隊隊長のハン・テギヨ中佐が、副隊長のジン・ヘイ少佐に尋ねたが知るよしもなかった。

「大きなトンボみたいのが飛んでるな・・・。」

このトンボとはヘリのことであるが、幻想共和国内でも生産がまだできないヘリが飛んでいるのだ幻想共和国より少し技術力が高い元寇国が開発できるわけもないのである。

「こちらは、幻想共和国です。この山は、幻想共和国の領土である。速やかに撤収を開始してください！」

「女性のような声ですね。」

「いや、女性だろう。マイクをよこせ！」

「はい！」

- 幻想共和国防軍 -

「元寇軍からの返答は？」

「はい。いまだありません！」

「そうか……。」

「我々は、あくまで国からの命令でこの山にいる所存である。我々だけでは決めることはできない。」

「やはり、そう来たか……。」

「では、国のほうに問い合わせ撤収を開始してもらいたい。」

- 元寇軍 -

「結局こう来るよな……。本国に通信を開け！」

「りよ、了解!!！」

元寇軍側は、すぐに通信を開いた。

「どうした。」

ノイズ音と共にハンの声が聞こえてきた。

「幻想軍が来て立ち退きを要求してきました。」

「……。そうか。なら、敵を一掃せよ。一人足りと残す出ない

ぞ。」

「は、はい！」

素晴らしい終わると同時に通信が切れた。

「くそ！」

「本国はなんと？」

「敵を一掃せよとのことだ。」

「そ、そんな、本国は我々に死ねと？」

「命令に逆らったら処刑される。」

こうして、幻想共和国防軍と元寇軍は初めて、山岳戦を繰り広げようとしていた。

山一号作戦 交渉開始（後書き）

次回は、山岳戦を繰り広げられるようにしたいと思います。まさかの増援も出てくる・・・かな？w

山一号作戦 山岳戦1（前書き）

今回は、無理やり要素が満載予定です。¥（^o^）ノオワタ
ではんじゅ。

山一号作戦 山岳戦1

・・・妖怪の山・・・

「元寇軍からの返答は来たの？」

「あ、霊夢さん。いえ、まだですが・・・。」

「そう・・・。嫌な予感がするわ。」

「思い過ぎじゃないのかだぜ？」

しかし、こんな時の霊夢の予感が的中するとは誰も思っ
てみなかったであろう。

ドーン

大きな音がして閃光が向かってきて木に命中して爆発する。明らか
な元寇軍の攻撃であった。

「元寇軍の戦車が発砲してきました！敵部隊も進行してきます！」

「何！？・・・くそ！本国へ通信開け！」

「了解！」

そう言うのと物の数秒で通信が紫・・・ではなくその式神である八
雲藍につながった。

「どうかしたのかな？」

「あ・・・いえ。紫首相は？」

ゼロもさすがに違う人が通信に出たのに驚いていた。

「紫様なら今は寝ているが・・・。何かあったのか？」

「元寇軍が攻撃してきました！反撃の許可を申請します。」

そう。幻想共和国防軍はどんな状況であろうと、総理大臣である
紫の許可なしでは軍として攻撃または、反撃することが禁止してい
るのである。

「分かった。紫様を起こしてこよう。」

「お願いします。」

・・・数刻後・・・

「うん。それで何かしら？」

ものすごく眠そうな顔をして通信に紫がでた。

「元寇軍が攻撃を仕掛けてきました！反撃を許可願います！」

すると、紫は少し考えているようで少し黙ったが、ついに口を開いた。

「分かった。許可するわ。ただし、敵味方の被害を最小限度に留めて頂戴。分かったわね？」

「了解です！」

そう言い終わるとともに通信は切れた。

「総員！反撃開始せよ！山砲部隊は歩兵部隊を援護！重戦車を前面に押し出して進撃！ヘリと戦闘爆撃機は空中から敵戦車を攻撃しろ！歩行がたミサイルポッドは対空ミサイル用意！敵機がいつ来かわからんぞ！」

「了解！」

すぐに伝令が通信で全部隊の無線機に連絡した。すると、兵士たちの士気が凄く勢いで上昇した。

「うおー！やってやるぜ！」

「俺たちの恐ろしさ思い知らせてやるぜ！」

「妖怪の恐ろしさ思う存分味あうがいい！」

という奇声にもにた叫び声が至る所から上がった。それによって霊夢と魔理沙がひいていたのは余談である。

「全機！敵の戦車に爆撃しろ！」

「了解隊長！」

元ライトニア国防軍の主力戦闘爆撃機に乗っている北野吉雄大尉きたのよしおが命令すると、幻想郷でベテランとして認められ速投入された飛行

兵であるリグル・ナイトバグ（曹長）となんと、チルノ（軍曹）が敵の戦車隊が進撃しているルートへと爆撃するために向かっていた。なぜ、二人がいるかというところを飛んでいるためにもしかしたらということでも試験してみたところまさかの好成績を収めたため、実戦投入されたのである。

「よし、そろそろだな……。投下開始！」

吉雄大尉が命令すると戦闘爆撃機*SB-12から*十二式無誘導爆弾が6発投下される。すると、運の良いことに6発すべてが敵の戦車に命中し、周りの兵士ごと粉碎した。

「やった！当たった！」

リグルは命中したことに歓声をあげ、

「やっぱり。あたいたい最強ね！」

チルノは相変わらずの？ぶりをキャノピー内で発揮していた。

「よし、撃て！」

そう井上大佐が命令すると*SG-9戦闘ヘリから*SVT空対戦車ミサイルが一発ずつ放たれる。ほとんどが外れて戦車の後ろで爆発が起きているが数発は、誘導し戦車の砲塔部分に着弾し、戦車を無力化していった。

山一号作戦 山岳戦1（後書き）

今日用語

・SB-12：元ライトニア国防軍の主力戦闘爆撃機である。武装は、20mm航空機関砲×2、JUP空対空ミサイル、十二式無誘導爆弾×2が搭載されている。安定性が高く、空戦、空爆両方が行える汎用機であるが、旋回性能に難あり。愛称は「スカイドック」である。

・十二式無誘導爆弾：投下すると誘導なしで落ちる爆弾。そのため命中するかどうかはパイロットの腕で上下される。愛称は「リベロファットマン」

・SG-9：元ライトニア国防軍の主力戦闘ヘリ。武装は、12mm機銃×2、SVT空対戦車ミサイル×4、後部対空機銃である。

旋回性能と運動性能が高く奇襲作戦にも運用予定の戦闘ヘリ。しかし、3人乗りという意外な一面も持ち合わせており人員が足りなくなるという意見もある。両翼の端に機銃がついているために機銃の命中率は低い。愛称は「ナイトキャット」

・SVT：戦闘ヘリ搭載型の対戦車ミサイルである。誘導率は普通だが、ベテランが放つと悪魔のようなミサイルとなる。戦車の弱点の一つである砲塔部分を誘導するように作られている。愛称は「リベロマウス」

切れが良かったのでこの辺で保留です。では。

山一号作戦 山岳戦2 (前書き)

まさかの展開ありの無理やり話になっています。その辺はご了承ください。

山一号作戦 山岳戦2

- 元寇軍 -

「くそ、今のはなんなんだ！」

ハン隊長はミサイルなんてものを知らない世代の人間であったためにまったく分からなかった。

「なんか飛んできましたよね……。うわ、我が軍のM4戦車の砲塔部分グシャグシャ。」

そう、第二次世界大戦中の各国の兵器を主に使いつづける元寇軍の戦車は、近代戦でも効果を発揮するミサイル（ライトニア製）にとつて敵ではなかった。

「結構……。頑丈だと思ってたんですけど……。地面の一部すら吹き飛んでますし……。」

「え〜い！敵の兵器は化け物か！」

- 幻想共和国防軍 -

「大佐……。自分戦車の砲塔部分が完全に吹き飛ぶのは初めて見ました。」

「ああ……。僕もだ……。」

幽末大佐にそういったのは同じ戦闘ヘリ乗りのミナ軍曹だ。そう、近代戦以上の戦いを経験している元ライトニア国防軍人たちにとつて戦車の砲塔部が完全に吹き飛ぶのを見るのは初めてだったのだ。

「中に乗ってたやつは……。気の毒だが即死だろうな。」

幽末は、外伝で語ったとおり、人が目の前で死に行くのを見ていたのでまた、密かに心に傷を作っているものであった。

「撃って撃って撃ちまくれ！なるべく、当てるな！殺さないよう

に無力化するんだ!」

ゼロがそう命令している間にも戦闘が激化していく。

「この!ぐあ!」

「一名負傷!」

「衛生兵!急いでくれ!」

そう言つとそこらじゅうで衛生兵が担架を担いで敵の猛攻を潜り抜けながら戦傷した者を担架に乗せて衛生兵のテントに運んでいく。

「砲弾装填完了!」

「よし!砲塔と、車体の撃目を狙え!」

「へ?・・・撃目、ですか?」

「そうだ。」

「は、はい・・・。了解です。(何で撃目?)」

そう思いつつも照準を撃目にあわせて撃つた。

するとM4シャーマンが撃目のところから吹き飛んだ。そう。砲塔部分が飛ぶかのごとく。

「な!?!」

「一度やってみたかつたんだよね。」

ちょうど敵が車内から全員脱出するのが見えたのでよかったが、そうでなければ敵の戦車兵たちは大参事になっていただろう。

・・・妖怪の山交戦地帯近くの森林・・・

「隊長殿!先ほどから銃声や戦車砲の発射音が響いています。近いですね。」

「ああ、だが、片方は我らが宿敵アメリカさんだろうが・・・。

もう片方が・・・わからん。発射音がでかいな。ソ連産か?」

「ソ連とアメリカが戦争しているのはおかしいのでは?」

「ああ・・・。なんなのだろう。」

そう話しているのは、旧日本軍の軍服を着ている兵士たちである。「とにかく、近づく。敵さんだったらこの身に変えても撃破せ

ねば。」

「了解！・・・総員！移動！」

そう、このときこの旧日本軍兵たちは知らなかった繰り広げられている壮絶な戦いの様子を・・・。

「ありや、シャーマンだな。もう片方は、分からんな。」

「確かに、わかりませぬ【ババババババ】ん？・・・なんだ！
？あれ！」

「どうしたの・・・か・・・。」

隊長までもが口をあけ目を見開いている。なぜなら自分たちの真上を大きな鉄の塊が上についたプロペラで空を縦横無尽に駆け回っているのだ。

「・・・。まあ、おいておこう。うゝむ。見るからにシャーマン使ってる方がアメリカかな？それで、向こうの方が日本か。我が日本は、あのような兵器を作れるまで勝利を繰り返していたか。」

「はい！そのとうりだと思います！我々も加わり必ず勝てるようにしましょう！」

「うむ、そのとうりだ。全員！天皇陛下の名のもと突撃だ！」

「『『『『天皇陛下万歳！天皇陛下万歳！』』』』」

- 幻想共和国防軍 -

「なんか聞こえませんでした？」

「ああ、なんか・・・万歳とか聞こえたな。」

「ええ、たしか『うお〜！』・・・ん？」

目の前の光景はすさまじかった。いきなり現れた旧日本軍の一個中隊が三八式歩兵銃を撃ち、撃った者から「バンザイ！」叫びながら突撃を開始している。銃剣で相手を切り倒し、シャーマン戦車の上に乗った者は、ハッチをこじ開け中に手榴弾をブチ込んでいる。

もちろんその戦車は中から爆発して無力化させていく。

「……。ちょうどいいな……。」

「……何がですか？」

「敵は、混乱している。この混乱に乗じて敵を確保する！あの日本兵の方々は、我々を味方だと思ってるからちよつどいい！」

「隊長！迫撃砲の準備ができました！」

「よし！合図と共に撃て！」

「了解！」

「日本兵に次ぐ！ただちに敵から離れよ！」

「離れるつて言ってますが……。」

「考えがあるのだろう！全員退避！」

そう言つと全員が森の中へ撤退していった。

「なんだつたんだ？あいつらは？」

元寇国軍は啞然としていた。

「よし！撃て！」

そう言つと、120mm迫撃砲十門から一斉に砲弾が放たれた。

「よし！生きてるやつ集合しろ！」

そう言つと元寇軍の兵士達は一転に集まるが、それが間違いであった。

「着弾！今！」

そう言つと同時に敵側で爆発と煙が上がった。

「よし！突撃！敵の残存兵を拘束せよ！」

山一号作戦 山岳戦2 (後書き)

はい。まさかの増援です。これからも投稿頑張ろうと思うので感想などありましたらお気軽にお寄せください。

山一号作戦 対空戦（前書き）

今回、いきなりですが元寇国軍の航空隊を出してみようと思います。

山一号作戦 対空戦

「このままでは負けてしまうぞ!!」
「そう叫んだのはハン隊長である。」

「くそ!・・・今まで一度も負けたことのない私が・・・」
すでにハン隊長のプライドはズタズタであった。幻想郷に来て一回も負けたことのないハン・テギヨ中佐であったが、目の前で自分の部隊が敗北へと向かっているのである。これほどの屈辱はないだろう。

「隊長!!本国から通信です!」

「なんだ!・・・ハンです。」

「どうやら苦戦しているようだな、ハン中佐?」

「ど、どうしてそれを!？」

「我らがハン様はなんでも知っているのだよ?」

「なるほど・・・。で?要件は?」

「今、航空隊二十機を派遣した。そろそろ、到着するはずだよ?」

「そうか・・・感謝いたします。」

「ではな。」

そこまでで通信は途切れた。

「航空隊が来てくれるぞ!もう少し耐えるんだ!」

「」「」「了解!!」「」「」

兵士たちの士気は少しながら上がった。

- 幻想共和国防軍 -

「隊長!敵を完全に包囲しましたが、まだ残っている後方部隊が攻撃を続けてきます!」

「報告ご苦労。うゝむ・・・そう攻めるか」隊長!大変です!!」
「・・・どうした?」

「レーダーに敵の飛行編隊を確認しました！」

「数は？」

「はい！二十機はいるものと思われます！」

「そうか……。本国に連絡！至急航空部隊の援軍を要請しろ！」

「了解！！」

……。幻想共和国第六航空師団駐屯基地……

ここ、第六航空師団駐屯基地は妖怪の山に一番近い航空隊基地である。配備機は零式艦上戦闘機二二型五機である。そんな、航空隊基地に政府から緊急連絡が入った。

「こちら第六航空師団駐屯基地。どうされました？」

『第一特殊任務部隊より、敵航空部隊接近中と報告が来ました。ただちに攻撃してください。』

「了解しました。ただちに航空隊を出撃させます。」

「……………回せー！」「……………」

パイロットたちはそう叫びながら自分たちの機体に全力で走っていく。その間に整備員が一斉にプロペラを回し始めた。

「……………コンターク！」「……………」

そう言うつと零式艦上戦闘機二二型五機が全機飛び立っていった。

整備員は全員が帽子を振って見送っている。

……。妖怪の山……

「敵編隊急接近！」

「全歩行型ミサイルポッドに通達！敵機が射程に入り次第迎撃せ

よー」

「了解！全歩行型ミサイルパッドに通達！敵機が射程に入り次第迎撃せよ！」

- 元寇軍航空隊 -

「隊長！敵までもう少しです。」

「ああ、全機攻撃用意！」

「りようk・・・ぐっぐあ！！！」

隊長が攻撃準備を命じた瞬間一機のJU 87 スツーカーが炎に包まれて粉々になった。

「くそ！いつたい何が起きたんだ！」

- 幻想共和国防軍 -

「敵機ロツク！発射！」

バシュー

ミサイルの独特の発射音と共に発射されたのは歩行型ミサイルポット専用の対空ミサイルである『SVH 対空ミサイル』である。

「敵一機撃墜！再ロツク開始！」

再ロツクを始めると隣のもう一基がミサイルを発射し、敵機を叩き落とした。

山一号作戦 対空戦（後書き）

微妙なところで終わらせてすいませんorz
次回は、空中戦を展開しようと思います。

山一号作戦 空中戦（前書き）

投稿なかなかできずすいません。今日は、クリスマスですね。

山一号作戦 空中戦

- 元寇軍航空隊 -

「くそ！！なんなんだ！？あれは！！」

「後ろを着いて来て・・・う、うわー！！」

「どうした？三番機応答しろ。・・・おい！くそ、やられたか！」

元寇軍の兵士たちは幻想共和国防軍のミサイル攻撃に恐怖していた。後ろを着いて来て最終的には着弾し、命中した機体ごと爆発を起こすからである。

「各機散開しろ！！」

「了解」「了解」「了解」

元寇軍航空隊は散り散りになって飛んで行った。

- 幻想共和国防軍 -

「敵機散開を開始しました！！」

「そうか・・・」

ゼロ中將は少し考えてから手元にある無線機を手に取り部隊全員に命令を下した。

「全歩兵部隊はそのまま前進！対戦車兵は、近くの敵戦車を破壊し歩兵部隊に合流！狙撃部隊は『音速徹甲弾』を使用し、味方部隊を援護！全戦車部隊は近くの敵戦車を破壊後車載機銃による対空砲火を始める！少しはマシンなはずだ！戦闘爆撃部隊は到着予定の味方戦闘機部隊と敵機を攻撃せよ！歩行型ミサイルポッドは司令基地まで後退！ヘリ部隊は敵司令部の攻撃にかかれ！以上だ。」

了解！！

それだけ返事をし、第一特殊部隊の面々は命令されたとうりの行動し始める。

「喰らえー!!」

戦闘爆撃機から空対空ミサイルが放たれる。その対空ミサイルは敵機に迷わず向かっていき敵機に着弾した。

「やった！これで蟲の事を少しは見直してもらえるかな？」

リグル・ナイトバグはコックピットの中でそんなことを呟いていた。しかし、その呟きの後、後ろから大量の閃光がリグルの機体のすぐのところを駆け抜けて行った。

「て、敵機!？」

敵機はリグルの機体を狙っていた。

(ああ、私ここで死ぬんだ……)

リグルは死を感じたが見てみると敵機が火を噴きながら落ちて行った。そしてそこから一機の機体がこちらへ向かってきて、

「危なかったね、リグル。やっぱり最強のあたいがいてよかったね。」

「ありがとうチルノちゃん。助かったよ。」

「じゃあ、あたいは向こうの方をたたくね。」

そう言い残してチルノとリグルは散開して敵機の方へ向かっていった。

「くそ！弾が！」

「撃たれた！」

「衛生兵！」

「撃ちまくれ!!」

「一時の方向に敵！」

「ショットガンを喰らいやがれ!!」

歩兵部隊と合流した対戦車兵たちは副武装として携行しているS G-9 散弾銃で敵を撃っていた。近くの敵なら一回射撃するだけで死へ導き、中距離の敵でも拡散した弾により致命傷は避けられない武器である。

「くそ！敵接近！」

「弾幕を張って近づけさせるな！！」

「車載機銃で対空砲火！？大丈夫なのか？」

「やらないよりマシだろ！撃て！！」

各戦車に搭載されている車載機銃から一斉に空の敵に向け対空砲火が上がった。そして、そのうちの一発がスツーカ爆撃機の方翼に当たり火を噴き始めた。ついには、方翼が焼け落ちバランスを失った機体は落ちて行った。

「各機ミサイルで敵司令部の周りを撃て！敵司令部には当てるな！死人が増える！」

了解！

そうして各戦闘へりからミサイルと機銃弾が放たれ元寇軍の司令部の周りは焼かれ、穴だらけになっていった。

- 元寇軍 -

「ハン隊長……。」

「どうした？」

冷静さを取り戻したハンは、部下に聞きなおした。その部下は小刻みにだが震えている。

「どうしたんだ？さっきの鉄トンボからの攻撃で怖がっているのか？」

「ち、違います。確かに先ほどの攻撃は怖かったです……。航空隊が全滅しました。」

「な、なんだと？」

「援軍にきた航空隊が全滅しました。敵は航空機を追尾する特殊な兵器を使用した模様です。」

「そうか……。」

ハン隊長は何かを考えるようにして考え始めた。そして、

「今の情報を本国に伝えよ！敵に降伏する。」

「た、隊長！降伏されるのですか!？」

「このままでは、勝てずに全滅するだけだ！お前達が人権的な扱いをしてもらえるように交渉してやる！」

「しかし……。それでは隊長が……。」

「私はどうでもいい。部下が無事ならな。」

「僕もおともするよ。副隊長としてね。」

「……すまん。」

・幻想共和国防軍・

「隊長！敵の司令官より入電！」

「分かった。こちらは、幻想共和国防軍第一特殊任務部隊だ。」

「私は、元寇軍特務任務部隊隊長ハン・テギヨ中佐だ。降伏を申し込みたい。……それで部下の事なのだが……。」

「ご安心ください。降伏する兵士は人権に沿った対応をさせていただきます。」

「感謝する。」

……数刻後……

元寇軍の部隊は全員が即時武装解除、降伏した。

「負傷者の搬送急げ、敵味方問わずだ！一人足りると死人を出すな！」

ゼロ中將がそう命令していると数名の歩兵がハン・テギヨ中佐とジン・ヘイ少佐を連れてきた。

「部下をありがとうございます。」

そう二人から言われたゼロ中將は、

「いえ、我々のいた世界ではこれが当たり前ですし、この幻想共

和国の命令でもありますので。」

「……で、私たちの処遇は？」

「まあ、ほかの方々と同じように捕虜となるでしょう。」

「?!?」

ハンとテギヨは驚いていた。普通なら隊長や、副隊長という身分の者は降伏してもどうなるか分からないものだというのが普通の捕虜になるというのだから。

「……ありがたい。」

こうして山一号作戦は幻想共和国の勝利で終わったのであった。

山一号作戦 空中戦（後書き）

ようやく山一号作戦終了です。

戦勝報道と、ハプニング（前書き）

今回、苦手な方は見ないほうがいいかも知れません。まあ、前半は普通なのですが、後半がちょっと……。どうしてこうなった。

r
z

戦勝報道と、ハプニング

山一号作戦終了の翌日、戦勝は射命丸文の「文々。新聞」により大々的に報じられたのである。

□

山一号作戦！我が国の勝利！！

先日妖怪の山にて、妖怪の山義勇軍、国防軍第一特殊任務部隊による元寇軍掃討作戦「山一号作戦」が展開された。当時同行していた博麗の巫女である博麗霊夢氏（お賽銭募集中）、霧雨魔理沙氏は「すさまじかった。弾幕ごっこではなく真正正銘の殺し合いだった。」と話した。

四時間にも及ぶ戦いで勝利したのは我が国のほうであった。幸い我が国の方には死者は出なかったものの、元寇軍側には多数の死者が出た。妖怪の山義勇軍分隊長である犬走椋氏は「私達の山に入ってきたからには全力で追い出さなければならなかったが、あそこまで激化するとは思わなかった。」と話した。また、第一特殊任務部隊の部隊長であるゼロ・マーキュリー中將は「敵側に数多くの戦死者を出してしまったことが残念でならない。」と話した。

□

この記事を読んだ幻想共和国民は、

「おおーい！！新聞読んだか！」

「ああ、読んだぜ。勝利したってな！」

「へ！元寇国のやつらザマーみろってんだ！！」

と元人里（現幻東市）内は、戦勝記事のことで騒ぎになった。ついに、

「幻想共和国万歳！！幻想共和国万歳！！」
という歓声が上がった。

・・・幻想島 第一特殊任務部隊基地・・・

この日、部隊の全員総勢10万人が超大ホールに集合していた。
演台にゼロが上り全員が黙って言葉を待つと、ゼロは笑みを浮かべながら

「先日任務に参加した者、この基地に残り防衛の任務に当たっていた者。本当にご苦労だった！閣下より休暇をとってよいとの通達があつたため、本日は全員休暇を許可する！ゆっくり休んでほしい。以上解散！」

ゼロがそう言い終わると、全員が

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

と歓声を上げて我先にとばかりに出入り口から出て行った。

「さて、僕も休ませてもらいますか。」

そういつて幽末が出て行こうとするとゼロが

「幽末・・・。いいか？」

「・・・ハア」

幽末は大体理由は分かっていたのでゼロについていった。

「で、今度は何を押し付ける？」

「昨日の戦いの報告書だ。」

「・・・何度も言っているが、それは隊長であるゼロが書くべきじゃないのか？」

「いやー。こういうの書くの苦手だからな」WWW「

「・・・ハア」。分かった書いとくよ。」

「ありがとな！じゃあ、頼んだぜ！！」

「休暇・・・今回もなしか・・・とほほ」
こうして幽末の休暇は消えたのであった。

・・・深夜・・・

この島にあるただ一箇所だけある入浴場、それは温泉型である。
なぜなら、ゼロが「どうせなら、精神的に疲れる温泉にしないか？」
という意見より作られたものである。

そんな入浴場もさすがに深夜（特に任務の後や、休暇の日）は誰もかもが寝入ってしまった、誰もいない入浴場に一つ影が近づいて行き、入っていった。

時間性で、男女の入浴が入れ替わるタイプの入浴場なので男女で分かれていない。その扉を開けて中を覗き込んだのは、

「・・・誰もいない・・・よね？」

霧夜創であった。普段他の人（男女関係なく）と一緒に入るのを絶対に拒む創は軍に入隊して以来深夜人のいない時間を見計らって入りにきているのである。

創は浴室の扉を閉めて脱衣室で服を脱ぎ始めた。

「・・・。はあ、いつかばれるだろうけど、僕・・・女なんだよね。」

そんなことを呟きながらタオルを巻いて湯船に浸かった。

「ハア〜。いつ言おう・・・。」

そんなことを呟いている頃、入浴場に近づく一人がいた。

「はあ〜。まさか、報告書書きがこんなにかかるなんて・・・。」

幽末であった。報告書には、ゼロしか分からないところがあり、電話して聴きながら書いていたので時間がかかっていたのである。

幽末が更衣室に入ると一着脱いだ服がきれいにたたまれて一つの棚に置かれていた。

「先客か？こんな時間に・・・。まあ、いいか、早く浸かって早

く寝よう。」

そんなことをいいつつ扉を開けるといた先客は……。

「「なっ!!!／／／」

創と幽末は同時に驚きの声を上げて二人で顔を耳まで赤くし始める。

「お、お前女d『待つて、待つて』……ムグ」

幽末が言おうとする言葉を完全にパニック状態の創に口を手でふさがれた。

「ハア、ハア、ハア……いいですか！絶対にみんなに言わないでくださいね！僕の友達にもですよ!!!」

「分かった。……とりあえず／／タオルで隠してくれないか？」

「つつつつつ!!!!!!／／／／／／」

声にもならない叫びを上げながら創は湯船に飛び込んだ。

「ま、まあ、とりあえず僕出るから!／／／」

「……いい。……ここにいて。／／／」

「あぁ……。」

戦勝報道と、ハプニング（後書き）

次回に少しだけ続きます。後半苦手な人で見てしまった人！僕は、前書きで注意しておきましたから知りませんよ？責任は、負いかねます。

入浴場にて幽末は過去を語る（前書き）

今回全部が前回の続きみたいなお物に仕上がってしまいました。どうしてこうなったwwww

最近どうしてこうなったしか言っていないですねwww
苦手な方は、閲覧をご遠慮ください。

入浴場にて幽末は過去を語る

・・・入浴場・・・

「・・・・・・・・」

とりあえず、気まずい二人はお互いに逆に体を向け合って湯船に浸かっていた。そして以外にも創の方から声を上げた。

「ねえ・・・本当に秘密にしてくれるよね？」

「ん？・・・あ、ああ。」

「約束だよ／＼誰にも教えてないんだから／＼」

「ああ、分かった。さて、秘密を教えてくださいましたことだし僕も秘密を教えるよ。」

「え？・・・ええええええ！？」

幽末が言い終わり創が振り返ってみると、そこには一匹の霊魂が浮かんでいた。そして、優末の左目が赤く染まっていた。それに創は驚きの声を上げた。

「やっぱり驚いた？実は僕は妖怪「半人半霊」なんだよw」

幽末はそんな事を言いながら笑っている。

「・・・・・・・・。やっぱり幽末さんは生まれつきから妖怪ですか？」

「ん、いや僕は、元人間の妖怪さ。」

「ええええええ！？」

幽末の発言にまた創は驚きの声を上げた。

「では、転生者ですか？」

「そうであって、そうでない微妙なところだね。」

「え？」

「・・・・・・・・。あるところに、一人の男の子が生まれました・・・・・・・・。」

ここから幽末の結構長いお話になります。

あるところに、一人の男の子が生まれました。その子は、生まれつき他の子と違うところがありました。なぜなら片目が赤かったのです。その子の両親は、怖がることもなければ、恐れることもしませんでした。それに、

「「どんな容姿でも生まれてきてくれて良かった。」」
そう言ったのです。

その子は、十二歳になりましたが一向に目が普通の色に戻ることはありませんでした。そして、その子は一つの力が赤い目に宿っていました。幽霊が見えるのです。しかし、その子が暮らすその村には一つの言い伝えがありました。その内容は、

『この村に赤い目を宿した者が生まれるときそれは、この村の死を意味する。死を迎えたくなければその者を生んだ両親とその子を葬れば死は訪れず、生が待っているであろう。』

この言い伝えは村の全員が信じた。そして、村人が刻一刻とその子と両親を葬るため家へと近づいてくる。その子の両親は我が子に「「いい？絶対にどんな音がしても出て来てはダメだよ？分かった？」」

そう聞きました。その子は首を縦に二回振って頷きました。

「「いい子だ。」」

父親はそう言い

「「あなたは私たちの自慢の息子よ。」」

母親はそう言っつてその子を屋根裏部屋にこもらせました。

数刻後、響くのは罵声と村人たちの奇声にも似た怒鳴り声、そしてかすかに聞こえるのはうめき声である。その子はまだ十二歳という年齢でいながらその音を耳をふさいで何とか精神が崩壊しないようにこらえていました。

数刻後、奇跡的にも屋根裏部屋への入り口は見つからず村人たちは外へその子を探しに行きました。その子は精神が崩壊寸前の状態で部屋から出て見た光景は、背中に農機具が刺さり大量の血を流して死んでいる両親だった。その子は、それを見た瞬間に精神が崩壊

それから、その子は人間に気づかれないうちに活動していたのですが、ある日ある家族に拾われたのであります。

(ここから先は外伝を呼んでください。(^ w ^ ;))

「これが、僕の昔の育ちさ。」

幽末が話し終わった時には創はもう、涙をボロボロ流していた。

「ご、ゴメン。変な話しちゃって……。」

「い、いえ。大丈夫です。……グス」

翌日、幽末と創が初めて眠そうな顔で気まずい雰囲気を漂わせていたことに周囲は疑問を抱いたという。ゼロに限っては。

「……。あいつら、何があったんだ？」

入浴場にて幽末は過去を語る（後書き）

次回から話をどんどん進めて行こうと思います。

幽末と創はどうなるか？

まだ決まっていますよWまあ、お楽しみにという事で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8985x/>

東方異世界大戦

2011年12月26日23時50分発行